

八王子社(朝日町)の建築について

吉 田 純 一*

The Main Hall of Hachioji Shrine in Asahi Town, Fukui Prefecture

Junichi Yoshida

The main hall of Hachioji shrine is the syouzu destric of Asahi town in Fukui pref. This historic building has the thatched roof rarely now and remarkable design such as Kaerumata, Kibana, Kouryou and so on. I think that it was built at the late of Edo period, about two hundred years ago.

1. 緒 言

本報告は、朝日町教育委員会から委託を受け、平成12年7月15日に福井工業大学建設工学科吉田研究室が実施した八王子社の建築に関する調査の報告である。

朝日町上糸生の清水地区に鎮座する八王子社は、昨今では珍しい、茅葺きの神社建築で、清水・杖立両地区の氏神様として現在も地区民の厚い崇敬を受けている。内部の壁や天井は近年修理され、新材が用いられているが、柱や梁などの構造部材や外観はほぼ創建当初の様相をよく伝えている。

当社の由緒は明らかなでないが、『神社明細帳』にみられる清水神社が当社にあたるという。以前は大窪谷の山中にあったが、氏子の夢枕に神様が立たれ、お念仏の聞こえる処に移りたいとの御依頼があつて現在地に移されたと伝わっている。そして、明治43年7月に上糸生地区の六集落の氏神が八幡神社(上糸生)に合祀された際、清水地区民は薬師如来像を差し出したものの、お宮は地区の氏神としてそのまま当地に残したという。

ちなみに、祭神は少無彦名命で、内陣には男神像2体、女神像1体が安置され、左相殿には泰澄大師とみられる法衣像と聖徳太子像が祭られている。なお、社の名、八王子は応神天皇の御子との説もあるが、定かではない。

2. 八王子社の建築形式

(1) 建築形式

八王子社の社殿は、桁行(けたゆき)3間(18.7尺 5.67m)・梁間(はりま)3間(15.6尺 4.72m)で、正面に1間(7.8尺 2.365m)の向拝(こうはい)が付き、背面に半間幅(3.1尺 9.33

* 建設工学科 建築学専攻

m)の祭壇部が張り出している。屋根は入母屋造(いりもやづくり)、茅葺(かやぶき)、平側に入り口をもつ平入(ひらいり)の建築である。

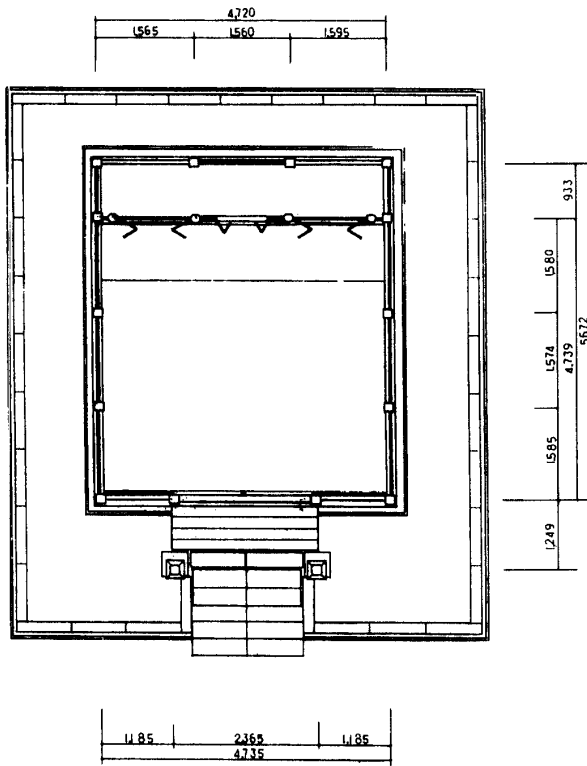
社殿は昭和50年10月に修築された高さ約1尺8寸(54cm)の切石積み基壇(きだん)上にたち、基壇面から棟までの建築自体の総高さは約26尺余(約8m)である。正面に石階段があり、向拝には4級の木階(きざはし)があつて社殿内部に通じている。基壇面から床までの高さは約4尺(約1.2m)、周囲の柱は4寸7分~4寸9分(14.5~14.8cm)の角柱で、布基礎・土台上にたち、両側面と背面は横羽目(よこはめ)の板壁で、両側面は腰長押(こしなげし)と内法長押(うちのりなげし)および頭貫(かしらぬき)を含む4段の貫で固められている。柱頭にのる組物(くみもの)は拳鼻(こぶしばな)付きの平三ツ斗(ひらみつと)で、軒裏は化粧垂木(けしょうたるき)が用いられている。正面中央の向拝の柱は身舎柱(もやばしら)と海老虹梁(えびこうりょう)で緊結されるが、屋根は身舎の流れの先端にやや厚みを持たせているだけである。なお、向拝柱をつなぐ水引虹梁(みずひきこうりょう)の両端の彫刻は、古式の鯖切(さばきり)で処理され、その上の中備(なかぞなえ)には二組の平三ツ斗がみられる。

(2) 平面形式と復元的考察

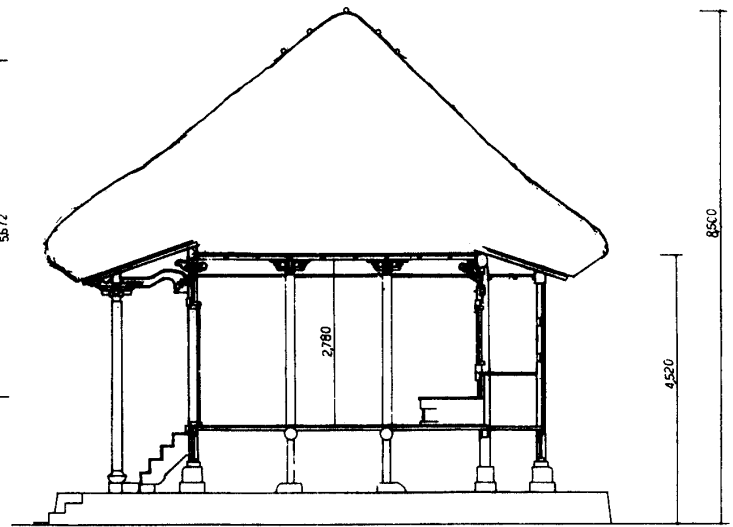
身舎部はすべて拝所で、桁行、梁間ともに3間であるが、桁行(左右)は18.7尺(5.67m)、梁間(奥行き)は15.6尺(4.72m)である。床は板敷き、天井は棹縁天井で、後方約半間は50cmほど高くなって祭壇部に続いている。祭壇部は身舎の向背部から半間張り出して設けられている。

拝所の入り口である正面中央間には、菱格子入りの板戸二枚を引き分け、これ以外の正面両脇間と両側面はすべて板壁で閉ざされている。内部の間仕切りで特に注目されるのは、拝所と祭壇部境である。この柱列には約5寸径の樗(けやき)の丸柱が四本たち、各柱間は両折れ扉二枚をたてて間仕切られている。特に中央間の両折れ(もろおれ)扉の繊細な彫刻装飾は目を見張る。また柱頭の組物は出組(でぐみ)で、身舎廻りにみられる平三ツ斗より格式の高い組物が用いられ、拳鼻も内部を刳り貫いたもので、特徴的である。柱間間の中備には蟄股(かえるまた)が用いられ、拝所の天井との高さの違いは支輪(しりん)で処理している。この柱列の丸柱は、いずれも束(つか)上にのり、その束は礎石で支持されるが、束の下端は副木を入れて高さを調整している。祭壇部背後の柱には現祭壇部の床より低い位置に旧根太掛(ねだかけ)の痕跡(こんせき)があり、以前は拝所と同じくらいの高さで床が張られていた可能性がある。また、両端の丸柱は、側柱から8寸ほど内側に離れてたつが、本来ならば、両端は側柱に納める方が背全であろう。しかも祭壇に向かって右端の丸柱には床下部分に「森側外柱」との墨書がみられる。他の柱にはこうした墨書を確認できないが、これはこの丸柱が後世に入れられたことを示唆しているとみられる。このように拝所・祭壇部境に特異性、不自然さが認められるのは、祭壇部が当初から現状のような状態ではなく、後世になって改修されたためと考えられる。

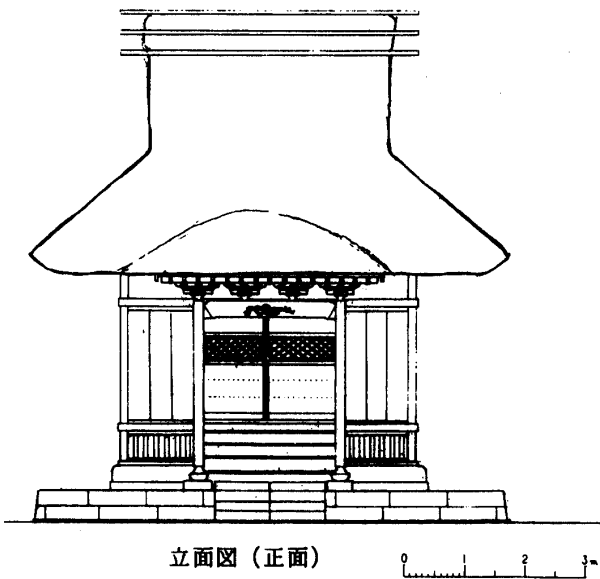
八王子社(朝日町)の建築について



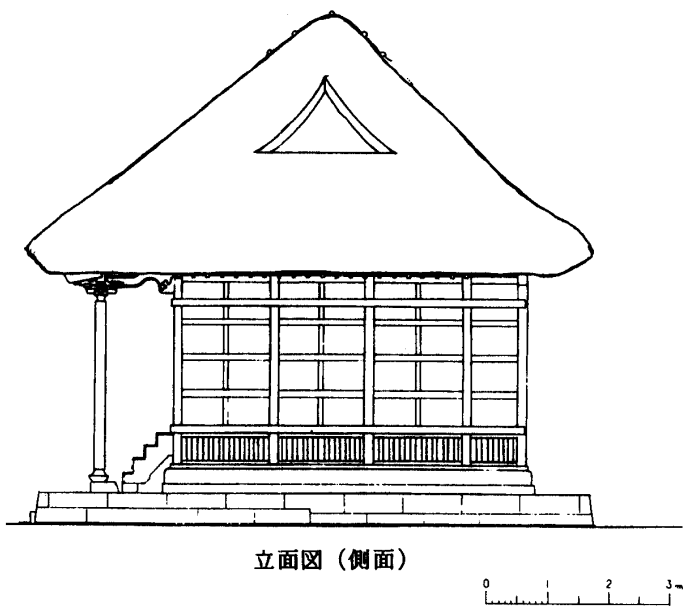
平面図



断面図



立面図(正面)



立面図(側面)

なお、祭壇中央間には、一間社（いっけんしゃ）、入母屋造の厨子（ずし）が安置されている。高さは約5尺2寸（156cm）、正面に向拝、千鳥破風がつき、四手先組物（よてさきくみもの）で、扉脇には彫刻もみられ、小規模ながら装飾性の高い厨子である。

様式からみて幕末から明治期にかけてつくられたものと思われるが、痛みが激しく、早急な補修が望まれる。

3. 建築時期について

『朝日町史』の八王子社の解説によれば、文政7年（1823）の建立を示す棟札があり、それには棟梁（福井住の芦田久兵衛知景）や世話人（重里藤右衛門）の名もみられるという。ただし、現在、この棟札の所在がわからず、今回の調査でも建築年代や建築時期を示すような資料は何も検出されなかった。

しかし、外回りの柱や板壁の風触（ふうしょく）の度合いは大きく、かなりの経年をうかがわせる。また、組物の斗や肘木の形態、拳鼻の形状、さらに後世の改修とみられる拝所・祭壇部境の墓股の形式などはほぼ19世紀前半から幕末にかけての様相を呈しているとみることができる。したがって、『朝日町史』にみる文政7年の棟札を現社殿の建築年代とみなしても妥当と判断してよいと思われる。

4. 結 語（八王子社社殿がもつ建築的価値と意義）

八王子社の社殿は方3間を基本とする小規模な神社建築であるが、いくつかの特徴、特色が認められる。それらを列挙しながらこの報告のまとめとしたい。

- ①神社建築は人がお参りする拝殿とご神体を安置する本殿の建物からなるのが最も一般的で、当社殿のように拝所と祭壇部がひとつの建物におさまる例は、その簡略形とみてよい。当建築はこうした神社建築の簡略型の江戸時代までさかのぼる数少ない県内の現存例といえる。
- ②茅葺の社殿である。古くは多くの神社建築が茅葺であったが、茅の採取や茅葺職人の減少など、諸条件が重なり、現在では神社建築に限らず、茅葺屋根の建築はきわめて少ない。たとえば、福井県内で国や県の指定を受けている茅葺の神社建築の例はわずかに樺八幡神社古拝殿（美山町）だけである。
- ③すでに指摘したように、拝所・祭壇部境の間仕切りは後世に改修（でも相当古い）されたものであるが、中央間の扉の彫刻や組物、墓股の形式などは、江戸末の時代性を留めており、意匠的にも繊細で見ごたえがある。
- ④渡辺孝氏『清水八王子社由来記』にも触れられているが、「越前海岸等に旅行される県内外のマイカー族が珍しいお宮さんだと立ち寄っていかれる」という。このように当社殿は、脇を通る道路沿いの景観上も重要な役割を果たしている。

5. おわりに

昨今では茅の採取、茅葺職人の減少など、茅葺を維持するにはきわめて困難な問題が伴うが、以上のように八王子社の建築は建築的にも景観的にも重要な意義をもっている。当事者である地域の方々には、大きな負担になるはずで、決して無理強いはできないが、調査者としては何とか現状のまま守り伝えていって欲しいと思う。

茅葺の維持が無理ならば、現況の屋根形態を出来るだけ損ねることなく、銅板葺あるいは金属板葺に改変しても致し方ない。ところが、新築となれば、現社殿にみられる繊細な装飾などの再現は不可能で、氏神様として当地区の方々が200年余にわたって守り伝えてきた地域の歴史・文化遺産を自らの手で葬り去ることにも通じる。今日、地域の特有の歴史や文化を活かした住みよいまち、地域づくりが叫ばれているが、こうした歴史的建築はきわめて有効な資源になるはずである。この建築をなんとか保存し、朝日町清水地区の今後の地域づくりに積極的に活かしていくことを切望する次第である。

■謝 辞

調査に際しては、佐々木英治（朝日町文化財専門委員長）、木下召乙（同副委員長）、黒崎文夫（同専門委員）、水野彰雄（朝日町教育委員会生涯学習課文化財担当、中央公民館長）および清水地区の方々に多大なご協力、ご援助を賜った。末尾ながら厚く感謝申し上げたい。

■付 記

調査には著者の他に国京克巳（若越建築文化研究所所長）、中川理沙（福井工業大学大学院）、木村悠（同大学吉田研究室卒研生）、小酒徹也（同）、横山和宏（同）が参加し、図面の浄書は横山が担当した。

■参考文献

渡辺孝『清水八王子社由来記』（平成10年）

『朝日町史』（昭和51年）



写真1 正面



写真2 側・背面

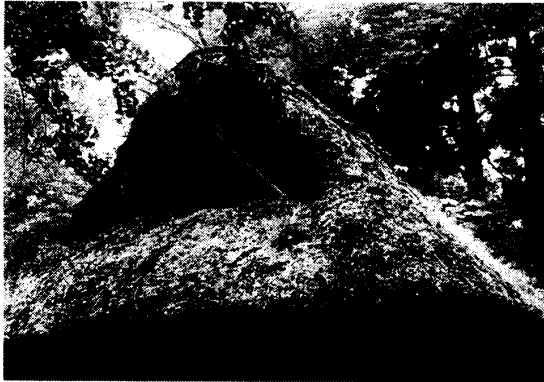


写真3 屋根破風



写真4 側面軒詳細

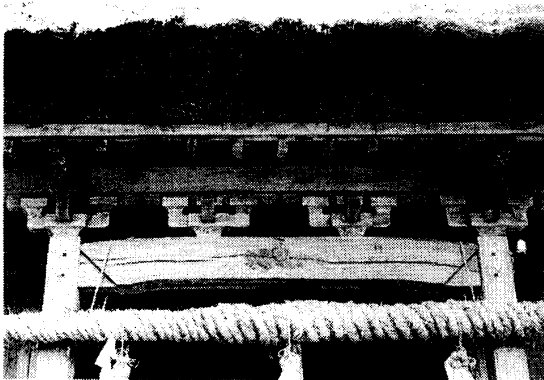


写真5 向拝上部詳細（正面）



写真6 向拝部詳細（側面）

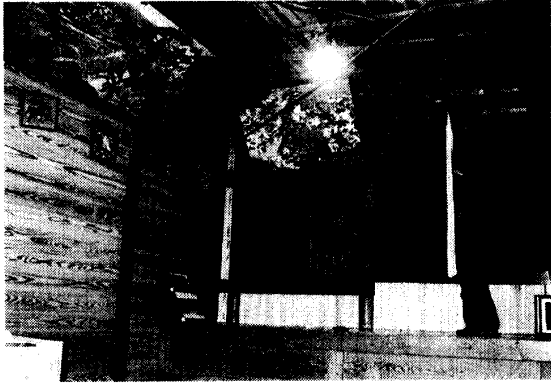


写真7 内部



写真8 内部祭壇部正面

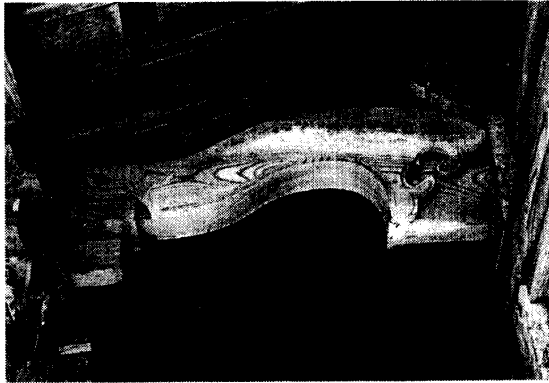


写真9 海老虹梁

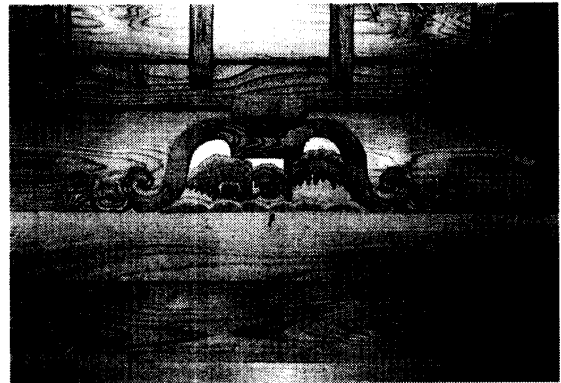


写真10 祭壇部正面の墓股



写真11 床下部



写真12 祭壇右端丸柱の墨書
(「森側丸柱」)

(平成12年12月5日受理)